

ドクメンタ 15 におけるインドネシアのコレクティヴ
—2022 年の共同調査に基づいて—
Indonesian Collectives in documenta 15:
Based on a Joint Research

趣旨説明

パネル責任者: 青木 恵理子 (龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター)
AOKI Eriko (Centre for Gender and Religion Studies, Ryukoku University)

本パネルの目的は、2022 年に開催された国際現代芸術祭ドクメンタ 15 における共同調査から得られたデータに基づき、インドネシアのコレクティヴとその集団化原理及び関係形成原理について考察することである。共同調査は、「グローバル化する社会における生の芸術」という共同研究の一環であり、ドイツ (ベルリンとカッセル) での調査期間は、2022 年 9 月 16 日から 29 日、ドクメンタ 15 開催地であるカッセルにおける調査期間は 9 月 18 日から 9 月 26 日、共同調査者は、インドネシアの近現代美術史を研究する羽鳥悠樹、ドイツの文化政策研究者であり現在ベルリン在住の高岡智子、1979 年からインドネシアのフローレス島諸社会の調査を、2015 年から障害者アートの調査を文化人類学の観点から行ってきた青木恵理子である。

ドクメンタは、戦後 1955 年からほぼ 5 年に 1 回のペースで、ドイツの地方都市カッセルで開催されてきた国際現代芸術祭である。ドクメンタの出発点は、ナチス政権によって「退廃芸術」として弾圧された近現代芸術の復権および国際的な芸術界でのドイツの存在感を示すことであった。ヴェネチア・ビエンナーレと合わせて二大国際現代芸術祭といわれ、ヴェネチアの方がアート市場と親和性が高いのに対し、ドクメンタは、グローバリズムなどの体制を批判し、アートマーケットから距離を置いていると言われてきた。

そのような歴史を持つドクメンタは 2022 年に 15 回目の開催となり、総合芸術監督にジャカルタで活動するアート・コレクティヴのルアンルパが選ばれた。ルアンルパは、インドネシア語の *lumbung* (共同米倉) を共通原理に、*nongkrong* や *majelis* を重要事項として、これまでのドクメンタとは異なる運営を展開した。それに関連して賛否両論の議論がさまざまな水準で展開された。本パネルは、インドネシアにおける集団化原理と関係形成原理を視野にとらえて、羽鳥はインドネシア近現代美術史に焦点を、青木は文化人類学の観点から、共同調査の成果を発表する。

発表者

(1) 羽鳥 悠樹 (九州芸文館) :

発表タイトル

主題: 第 15 回ドクメンタでルンブンが共有してくれたもの

副題: インドネシア近現代美術史の観点から

Title: What *Lumbung* Enables Us to Share in documenta 15

Subtitle: From a Viewpoint of Modern and Contemporary Indonesian Art History

(2) 青木 恵理子 (龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター) :

発表タイトル :

主題 : グローバルなポリティクス、ナショナルなヘゲモニー、ローカルなコレクティヴ

副題 : 人類学の視点から

Title: Global Politics, National Hegemony and Local Collectives.

Subtitle: From an Anthropological Viewpoint

発表 (1)

第 15 回ドクメンタでルンブンが共有してくれたもの
インドネシア近現代美術史の観点から

What *Lumbung* Enables Us to Share in documenta 15:
From a Viewpoint of Modern and Contemporary Indonesian Art History

羽鳥 悠樹 (九州芸文館)

HATORI Yuki (Kyusyu Geibun-kan)

本発表は、2022 年 6 月 18 日から 9 月 25 日までの 100 日間開催された第 15 回ドクメンタの美術史的意義について、主にインドネシアのコレクティヴの歴史的経緯に着目しながら考察しようとするものである。

ドクメンタは、ドイツのヘッセン州北部の都市カッセルにて、1955 年以来およそ 5 年に 1 度開催されている国際芸術祭である。1972 年の第 5 回以降、各回ごとに総合的な芸術監督が任命されるようになり、美術自体を問い直すような鋭いテーマ設定や、欧米中心主義的な美術界において、比較的早期から女性や欧米以外の出身者をディレクターに選出するといった点において、他の国際美術展と一線を画す。2022 年に開催された第 15 回ドクメンタでは、同芸術祭史上初となるインドネシアのコレクティヴであるルアンルパが芸術総監督を務めた。

初めてアジアから、それも個人のキュレーターではなく、集団であるコレクティヴがディレクターとなったことで一層注目を集めた第 15 回ドクメンタは、大きく 2 つの点で論争を巻き起こした。1 つは、反ユダヤ主義の問題で、参加アーティストの過去の活動や、出品作品に反ユダヤ主義的なものが含まれていることが問題視された。もう 1 点は、美術界の周縁に位置づけられてきた非欧米圏を中心としたキュレーションや、招待されたコレクティヴそれぞれが、さらにアーティストやコレクティヴを招待できるという、従来の欧米中心主義的な美術の在り方に全く従わない型破りな手法に、欧米側からの強い反発があった。しかし、まさにこの 2 点にこそ、同展でルアンルパが提起しようとした問題がある。

本発表では、2022 年 9 月 18 日から 25 日まで、インドネシアのフローレス島を主な対象としている文化人類学者の青木恵理子、ドイツの文化政策研究者の高岡智子と共同で行ったドクメンタの現地調査に基づき、上記 2 点の問題について、インドネシアの美術の歴史を参照しながら検討し、同展の美術史的な意義を考察する。

発表 (2)

グローバルなポリティクス、ナショナルなヘゲモニー、ローカルなコレクティヴ
人類学の視点から

Global Politics, National Hegemony and Local Collectives: From an Anthropological Viewpoint

青木 恵理子 (龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター)
AOKI Eriko (Centre for Gender and Religion Studies, Ryukoku University)

ドクメンタの芸術監督としては、アジア人であることも、個人ではなくコレクティヴという集合的なものであることも、初めてのことであった。ドクメンタのホームページにおけるルアンルパ紹介では、彼らの活動では社会性、包括性、友情、連帯、共同性が中心的価値をもち、それは、インドネシア文化に根差していると述べられていた。それに呼応して、ルアンルパはドクメンタ 15 のテーマ「ルンブン *lumbung*」を、集合性、共有、平等分配、共同作業の象徴として掲げ、展示や活動のなかに具現化していった。

他の国際芸術祭同様ドクメンタは、グローバルな政治の場でもある。ヴェネチア・ビエンナーレに比べ、グローバルな政治体制から独立性を保っていると評価されることの多いドクメンタであるが、それはあくまで比較の話であり、マイノリティを擁護するポリティカリイ・コレクトな表面のメッセージが、グローバルな潜在的な政治体制を正当なものとしているという批判が可能である。例えば、2012 年開催のドクメンタ 13 の開催地の一つはアフガニスタンであった。ドクメンタは芸術をもたらすことによってそれまで戦火にあった場所を力づけるというのが表面のメッセージであったが、アフガニスタンに表現の「自由」をもたらしたグローバルな新自由主義体制の正当性を見せるというのが、潜在的なメッセージである。ドクメンタ・コミティを含め、グローバルな芸術政治体制を支える諸勢力は、その体制を維持するようドクメンタをコントロールしてきた。

ところが、ルアンルパは、非常にソフトな形で、そのコントロールを無化するような運営を展開した。ルアンルパが、展示を行う「ルンブン仲間」として招待したコレクティヴ及び個人の多くはグローバル・サウスからであり、招待されたコレクティヴや個人がそれぞれの裁量で、展示を行うコレクティヴなどを招待できるようにしたため、膨大な数の展示参加者となった。また、ルンブンだけでなく、*nongkrong*、*mejelis* などのインドネシア語を主要概念として流通させた。

本発表では、ルアンルパなどのインドネシアのコレクティヴの活動の様態を分析することにより、グローバル、ナショナル、ローカルな水準における、政治性、集団化原理、関係形成原理について人類学的に考察する。